

広告 企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

雪に磨かれた和紙の美しさを、もっと身近に

阿部 拓也 長野／内山紙 伝統工芸士

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりにを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(フアッシュョン・シヤナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロジェクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティーイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。



プレゼンテーション

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロジェクトの制作に取り組んだ。



1月24日、プレゼンテーションにて



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

また当回は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロジェクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SUMIYAクリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(ANREALAGE/代表取締役社長・デザイナー)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター/プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて



バイヤーとの商談

発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「一筆双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。長野県選出の匠、内山紙 伝統工芸士の阿部拓也さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

和紙の需要減 時代の流れに挑む

350年という時を重ねてきた美しい和紙がある。雪深い北信濃の自然を利用して作られるその高級和紙は「内山紙」と呼ばれてきた。現在は、国の伝統的工芸品に指定されている。

原料は強く、しなやかな楮の樹皮だけ。この繊維を雪の上に広げておく「雪さらし」が、内山紙独特の上品な白さの秘密だ。雪が解ける際に発生するオゾン漂白効果だという。人の背丈をはるかに超える積雪で野山も里も閉ざされる冬、農家の生活を支える産業として定着した。

障子紙や習字紙として全国に知られた内山紙。丈夫で長持ち、変色しにくいというその性質は、辛抱強く、初心を忘れない、この地の人々の気質を見事に映している。かつてでもあった。



楮の雪晒し

内山紙100%のクラッチバッグ

和紙を素材にして何を作るか。阿部さんは「内山紙100%」にこだわった。キーホルダーや名刺入れなどを、経糸に麻糸を使って趣味程度に作ったことはあるが、今回は紙をより糸にしようと思った。

そして内山紙を肌で感じてもらうにつ、紙でも丈夫であることを感じてもらうため、日常的に持ち運べるクラッチバッグを作ることにした。

昨年6月のキックオフ・セッションの後、「工業製品として販売するためにはクオリティーの高い素材が求められる」との下川氏からアドバイスをもらい、新たに織機を購入し、試作に励んだ。紙のより方を均一化するために時間をかけ、それを織機で織っていく。家業を手伝い始めた時に繰り返した



エリア・コンサルティングにて

内山紙を生産する「有限会社阿部製紙」の長男として生まれた阿部さんは、幼いころから和紙に囲まれた環境の中で育ち、20歳で本格的に家業に入った。そんな阿部さんでも思い通りの紙ができるようになるまでには長い年月と、たゆまぬ努力が必要だった。

2010年、内山紙の伝統工芸士に認定され、注目を集めるようになった阿部さんは、同時に和紙の衰退を肌で感じるようになってきた。時代の変遷と共に生活スタイルや文化も変わり、障子紙や習字紙としての和紙の需要が年を追って減っているためだ。

需要が減った大きな理由の一つには、皮肉にも内山紙の品質が極めて高いこともある。「高級ブランド」である内山紙を名



完成した「内山紙100パーセントのクラッチバッグ」

「ここ半年間は目まぐるしいほど忙しかったし、プロジェクトが完成するの不安で眠れなかった日もあったけれど、これらは全て僕の財産です」

プロジェクトで知り合った他県の匠とコラボレーション



紙漉き作業

「内山紙という伝統工芸品をどう後世に残していくのか、ここ数年それはかりを考えていました。日々の仕事に追われ、立ち止まって考える時間がなかったけれど、今回のようなチャンスをもたらって本当に感謝しています」

試行錯誤の日々を、阿部さんはしみじみと振り返る。



阿部 拓也 長野／内山紙 伝統工芸士

1976年長野県飯山市生まれ。1997年、専門学校卒業後4月より家業の有限会社阿部製紙で紙漉きをはじめ。2010年に内山紙の伝統工芸士に認定される。母校の小学校では6年生を対象に原料の楮を学校で栽培して、和紙が出来るまでを勉強してもらい、収穫した楮で自分で自分の卒業証書を漉く指導をしている。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT